

作業科学：作業の研究

Wright-St Clair V. A. & Hocking C. (2014). Occupational science: The study of occupation. In B. A. B. Schell, G. Gillen, M. E. Scaffa (Eds). Willard & Spackman's occupational therapy (12th ed, pp. 82-94). Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.

「ウィラード&スパックマンの作業療法」の第9版(1998)の目次に初めて作業科学(OS)が登場し、10版(2003)、11版(2009)と、OSが冒頭に移行してきていたが、12版では少し様相が変わった。11版の第1部は「OSと人間の作業的性質(occupational nature of humans)」であったが、12版の第1部は「作業療法:専門職のプロフィール」となり、第2部が「人間の作業的性質」となった。第2部の最後の章が本章である。筆者らは、11版までの流れをみて、OSが作業療法(OT)から派生した1分野ではなく、OTの基盤として認知されたと解釈したが、12版では作業を中心に考える(言い換えると作業レンズで見る)という視点がOT全体に流布され、その結果としてOSは、再びOTに関連する一つの分野として収まりつつあるように見える。さらに、本書の執筆者の多くが米国に住んでいるにもかかわらず、本章の執筆者2名が住んでいるのはニュージーランドである。著者たちはJournal of Occupational Scienceの編集に携わっており、章末の謝辞は、米国のFlorence ClarkとカナダのMary Lawに贈られている。

本書は世界的に読まれているOTの教科書で、本章ではOSが何をOTに伝えるかが述べられている。冒頭に紹介されている事例は、15歳で父親になった青年が、子どもの誕生前に父親になることを誰かと話したり、地域センターの父親教室で子育てを学んだり、自分の趣味や仕事についての取り組みも行ったというものである。これは人生の変化が個人や地域にとってどのような意味があるか、新しい作業に結び付くためにはどのような学習やサポートが必要かを示しているという。

OSという言葉は知られるようになり、解剖学や社会学や心理学のように作業療法士が勉強するようになったが、どのようにOTに新しい方法を教えるかは明確ではないと書かれている。OSの誕生当初は、OSは基礎科学(basic science)であり、作業の観察できる(observable)側面と現象学的な(phenomenological)側面の研究だとされていた。「星の王子様」でたとえるなら、見た目では「帽子」だと観察されるが、王子にとっては「象を呑み込んだウワバミ」(これは王子の主観的リアリティであり現象学的側面に相当する)である。

OSは基礎科学としても発展してきたが、応用科学(applied science)としても発展してきた。研究を応用までつなげるものは、橋渡しの科学(translational science)と呼ばれる。これは、「健やか高齢者研究(Well Elderly Study)」を例に7段階のステップとして紹介されている。ステップ1は問題の特定(作業は老化速度を遅らせるか)、ステップ2は問題の理解(移動の確保や生活の安全性など、介入のためのニーズがあった)、ステップ3は介入法の開発(「ライフスタイル再構築」プログラムの開発)、ステップ4は介入成果の検討(ランダム化比較試験による介入効果研究とフォローアップ研究)、ステップ5は費用対効果の検討(介入費用と医療費の群間比較研究)、ステップ6は成果理由を探る研究、ステップ7は理論開発である。本章では、さらに他の3つの研究についても紹介されている。

まず、米国のランチョー・ロス・アミゴス・リハビリテーションセンター褥瘡予防研究(PUPS)は、脊髄損傷者の褥瘡発生状況を調べることから、当事者や関係者と共に予防法を開発し、効果を検証し、理論開発も進んでいる。

次は、カナダの身体障害児の参加に関する研究で、作業や環境を調整する介入を行った群が、心身機能に介入した群と同等の成果があったことがわかった。セラピストは、参加を測定する評価法を使うようになり、作業や参加に焦点を当てることに自信をもつようになったと報告されている。

ニュージーランドの日常生活の作業と上手な老い方: LiLAC (Life and Living in Advanced Age) 研究は、異なる民族や状況で暮らす高齢者の日常生活の作業を質的に研究し、介入法を開発しようとしている。今後、橋渡しの研究として発展することになる。

本章を読んで、OSが独立した学問となることで、OTとの関係も明確になり、OT以外の分野への貢献も確かなものとなるのではないかと考えた。

文献

- 1) 吉川ひろみ (2008). 「ウィラード&スパックマンの作業療法」における作業科学. 作業科学研究2, 31-34 (吉川ひろみ, 県立広島大学)